高橋秀寿著『時間／空間の戦後ドイツ史　いかに「ひとつの国民」は形成されたのか』

紀　愛子

一九四五年以降、ドイツがどのように民主主義を再建し、またそのなかでどのように自国の負の歴史と向き合ってきたのかは、歴史学の領域のみならず、一般にも高い関心が寄せられてきた。特に、ナチズムの過去をめぐる「過去の克服」の諸問題は、日本との比較という問題意識も相まって、幾度となく取り上げられてきたテーマであるといえよう。

こうした戦後ドイツを取り巻く関心において、主に対象化されてきたのは、「非ナチ化」やホロコースト犠牲者に対する補償政策に代表されるような、具体的な政策の変遷であったように思われる。一方、そうした政治的変化の背景にあったはずの、国民の意識とその変遷については、これまであまり目が向けられてこなかった。そこに焦点を当てたのが、本書である。著者は、メディアや大衆文化に発露する国民意識の描出に長けており、二〇一七年にはホロコーストをめぐる表象とナラティヴの変遷を描いた『ホロコーストと戦後ドイツ』も刊行している[1]。本書は、ホロコーストやナチズムの過去に焦点を限定せず、国民意識の形成と、それに深くかかわる時間／空間という観点から、終戦時から一九七〇年代までの戦後ドイツ史を再考しようとする試みである。

まずは、本書の目的と執筆経緯について確認しておこう。本書の目的は、終戦時から一九七〇年代までの西ドイツを対象として、終戦時、復興期、高度成長期、それぞれの時期の時間／空間が、どのような国民形成を行ってきたのかを明らかにすることである。「グローバル化／グローバリゼーション」概念がさかんに叫ばれるようになって久しい。しかし、この概念が、かつて内包したような「人類が国境をこえてつながり合えるユートピア」ではなく、グローバル化の対義語であったはずのナショナリズムと共存するどころか、むしろその誘因であることが明らかとなった近年の状況を前にして、「現在の国民形成とナショナリズムを歴史的に解明することが喫緊の研究課題となっている」との問題意識から、執筆されたのが本書である（「あとがき」より）。

本書の構成は、「あとがき」を除いて、以下のような章立てとなっている。

序　章　時間／空間・物語・国民形成
第一章　終戦時の時間／空間
第二章　復興期の時間／空間
第三章　復興期の国民形成
第四章　若者文化の時間／空間
第五章　高度経済成長期の時間／空間
第六章　時間／空間の変容と新たな国民形成
終　章　西ドイツで国民はいかに形成されたのか

では、各章では具体的にどのような「時間／空間」と国民形成が論じられているのであろうか。以下、各章ごとの要点を紹介したい。

序章ではまず、本書の目的が示された後、重要となるいくつかの概念について説明される。まず、本書のいう「時間」概念が、ベネディクト・アンダーソンの「想像の共同体」論と関連づけながら論じられる。アンダーソンによれば、国民という「想像の共同体」の生成に際しては、近代以降の「均質で空虚な空間」の誕生が重要な契機であった。しかし、そうした「時間」のなかで起こる出来事が相互に関連づけられ、意味づけられるためには、「物語」と「空間」という、もう二つの次元が必要であると、著者は主張する。「物語」は、起こった出来事やそこでの複雑な人間関係を、俯瞰的な視点から「国民の歴史」として理解するための枠組みであり、また「空間」は、そうした「物語」において、自分たちが帰属する空間である「社会」として「色づけ」されるべきものである。こうした「物語」をどう構成し、空間をどう「色づけ」していくのか――それは、国民間の様々な政治勢力による「闘争」を経て、その都度決定される。著者は、この「闘争」を国民形成の過程であると名づけ、国民の存在も「日々の国民闘争」と定義している。

第一章では、空襲と地上戦によって都市の大部分を破壊され、「瓦礫と廃墟」の景観が出現した終戦時の西ドイツにおいて、どのような「日々の国民闘争」が展開されたのかが論じられる。まず「空間」に関して著者は、戦争によって生じた、本来醜悪であるはずの「瓦礫と廃墟」の景観が、戦争の勝者であるアメリカやソ連の人々、敗者であるドイツ人の双方にとって、美的魅力や美学的価値を有するものであったと指摘したうえで、何故、このような美学的価値が、「瓦礫と廃墟」に見出されたかという問いを提起する。そのうえで、戦後初期に撮られたいくつかの映画をもとに考察している。例えば、映画「人殺しは私たちに紛れ込んでいる」では、主要登場人物である男女が口論の後に和解する場面で、「瓦礫と廃墟」がライトアップされるなど、意図的に美的に演出されているが、その美学的価値は、三つの美学に基づいているとされる。すなわち、戦争によって生じた苦悩と、それをもたらした者に対する怒りを、瓦礫と廃墟を通じて告発しようとする「告発の美学」、戦争の犠牲となった死者の声を代弁する「追悼の美学」、過去の清算と未来の始まりを象徴する「零時」を表象する「再生の美学」である。そして、この告発と追悼、清算という過程において、模範的な国民像とされたのは、「瓦礫の女たち」であり、戦争犯罪人などの「ナチス的人物」は、瓦礫と廃墟の世界の外部として描かれた。著者は、こうした国民形成の試みを通して、瓦礫と廃墟の世界が「西ドイツにおける国民的空間の原点」となった、と述べている。

一方、「時間」に関して著者は、ドイツには明確な終戦記念日はなく、終戦に対する当時の立場や態度も一様ではなかったと述べる。強制収容所の囚人たちにとって、終戦は「解放の日」であったが、多くのドイツ人にとっては、「崩壊」の感覚こそが、終戦時の時間感覚であった。この「崩壊」感覚は、終戦時に始まったものではなく、スターリングラード戦の敗北を境に始まり、戦後も深化・拡大していったという。このような感覚は、例えば、

一九五〇年初頭に行われた世論調査で、「ドイツが最も最悪だった時期」として、多くのドイツ人が「四十五～四十八年」と回答するという結果にもあらわれている。こうしてドイツの戦後は、スターリングラード戦の敗北と地続きの、克服されるべき崩壊状態のなかに位置づけられたという。

第二章では、一九五〇年代の流行歌や映画、都市計画をもとに、当該時期の時間と空間について論じられる。一九五〇年代にヒットした流行歌は、故郷＝ハイマートに思いを馳せるものが多く（「ハイマート・ソング」）、そこでは、「正常性への回帰願望によって美化された古」が歌われた。映画においても、田園・村落を主要な舞台とする「ハイマート映画」がブームとなり、ハイマート空間への回帰が描かれた。ハイマート映画の基調をなしていたのは、「反都市」の思想であり、その筋書きとして多用されたのは、都市における人間関係や金銭関係などの問題が動機となって都会人がハイマートへと向かうというストーリーであった。つまり、都会でもたらされた誤解や軋轢、あるいは歴史がもたらした社会問題が、「自然と慣習という必然的で、非歴史的な秩序によって解決され、あるべき人間関係が形成あるいは回復していく過程」が、ハイマート映画のなかでは描かれたのであり、この過程こそが終戦後の国民形成の「時間／空間」を描き出していた、と著者は述べている。また、五〇年代の復興・都市計画においてスローガンとして打ち出された、「反都市」を基調とした二つの理念、「都市ラントシャフト」と「区分・構成され、弛緩された都市」もまた、この時期の自然とハイマートへの回帰願望をあらわすものとして紹介されている。

第三章ではまず、復興期の「時間」について論じられるが、ここで取り上げられるのは、当時のドイツ人の「未来観」である。アレンスバッハ協会が五〇年代初期から現在まで行っている質問、「人々の生活は明るくなっていきますか、あるいは暗くなっていきますか」に対して、西ドイツ人は建国初期から一貫して悲観的な傾向を持っていたが、五〇年代の調査結果においては、第三次世界大戦への不安という「外部」に対する不安が色濃くにじみ出ていた。こうした不安から、人々は私生活へ退去し、「必然性に支配された非歴史的な不変のハイマート」、「公的な領域から隔てられた重厚な安定した居住空間」、「自然とハイマートの要素を取り入れた都市空間」を志向したという。

しかし、このような志向は、ナチ体制期＝「褐色の過去」と無縁のものではなかった。ハイマート映画の多くはナチ体制期の映画のリメイク版であったし、「都市ラントシャフト」や「区分・構成され、弛緩した都市」もまた、ナチ体制期に練り上げられた構想であったと、著者は主張する。このようなことから著者は、「西ドイツの国家と社会は、ナチズムの否定を基本的な理念としていたにもかかわらず、国民の多数がその理念を支持・黙認していたという矛盾を抱えていた」と指摘する。そして、そうした西ドイツの復興空間の中には、生物学的な人種主義の要素と、異物を取り除こうとする排他性とが残存していた。そうした「異物」の一つが、反ナチ国家であると同時に反共国家でもある西ドイツが、自己確立のためにもっとも重視した「構成的外部」たるロシア人であったという。

第四章では、復興期における「若者文化」が取り上げられる。

この時期、先述のハイマート・ソングで描かれるようなハイマートの世界から離脱し、社会問題を引き起こしていると見なされた若者が社会現象化した。彼らは、「強がり」や「チンピラ」を意味する「ハルプシュタルケ」という言葉で呼称された。こうした若者は、復興期の国民共同体において「異端児」であり、この共同体にとっての脅威、「非国民」と見なされた。そしてハルプシュタルケは、「日々の国民闘争」の中で、ハイマートへの帰還を求められ、「過去の克服」の対象となったのであるが、六〇年代が進むにつれて、「克服」の対象は徐々に逆転していった。つまり、ハイマート的な時間／空間のほうが、「克服」されるべき対象になり、若者文化がヘゲモニーを握っていく。大量生産・大量消費のフォーディズム的な社会が発展するにつれ、そうした大衆消費文化の担い手として、若者は社会的価値を獲得していくことになる。そして著者は、そうした若者とその文化の価値の向上のなかに、後の「六八年」を可能にした社会的背景を見出している。

第五章では、若者文化のヘゲモニーによってフォーディズム的社会が成熟していくのに伴い、「ハイマート」に表象された時間／空間に訪れた変容が論じられている。その変容の発露としてまず挙げられているのが、都市空間である。それまで、単に「都市」対「農村」の対立軸に沿って評価されてきたこれまでの都市計画に対し、この時期からは、都市自治に対する市民の自発性や積極性に裏付けられた「都会性」の理念を重視した、新たな都市形成とライフスタイルが提唱されたという。さらに、「都会性」の理念をドイツ人から永遠に奪った「犯罪者」とナチスを見なすことで、都市計画の領域においても「過去の克服」が課題とされたと、著者は述べている。

映画においても、それまでのハイマート的な時間／空間の克服が行われた。映画館から客足が遠のき、主な観客層が若年層へと移行するにつれ、彼らにとって魅力ある映画の制作が危急の課題となった。こうして、当時まだ四十歳以下の若手映画人たちが、「ニュー・ジャーマン・シネマ」の担い手として登場してくることになる。こうした映画は、「社会的現実から逃避してハイマートに投影された理想の共同体を追い求める」かつてのハイマート映画とは対照的に、「社会的現実を直視し、西ドイツの現実の共同体を批判的に見つめる」ことを、観客に訴えかけるものであった。著者はここに、「ハイマート映画とそれをモデルにした国民共同体に対する痛烈な『日々の国民闘争』」を見出している。

第六章では、一九七〇年に締結されたワルシャワ条約と、それによるオーデル＝ナイセ線の承認、さらに東西ドイツの統一問題を基軸として、ドイツ国民国家の枠組みがどのように変容したかが論じられる。五〇年代の段階では、オーデル＝ナイセ線やドイツの東西分断を不当なものと見なし、その領土の復帰を求める声が多かったが、六〇年代に入ると、この傾向は徐々に変化した。すなわち、オーデル＝ナイセ線以東の旧ドイツ領土に対する西ドイツ国民の関心は徐々に薄れ、東ドイツに対する彼らの心理的距離もまた遠くなっていった。こうして、旧東方領土と東ドイツは、「今日と明日のドイツ」の想像の共同体の枠組みから外れていったという。

こうしたなか、復興期にハイマート理念に基づいて形成された「犠牲者の共同体」という枠組みは変容を余儀なくされ、「ドイ

ツ」概念は多元化していくことになった。一八七一年に統一されたドイツ帝国をドイツとする認識が残存する一方で、むしろそのドイツ帝国のなかで抑圧されてきた、民主的な自由を求める国民運動の系譜にこそ、新たなドイツ像を求める認識が出てきた。こうした国民観をめぐって、西ドイツ政治は「保守vs革新」の左右軸を構成することになった。つまり、旧来の「犠牲者共同体」から、政治的な左右両軸の国民共同体が拮抗する複合体へと、国民の在り方が変容したのである。

終章では、以上六章の内容が総括されるとともに、本書の対象時期以後、すなわち高度経済成長期以降の時間／空間と国民形成に関して、展望が示される。著者によれば、一九七〇年代後半から八〇年代以降に、時間／空間と国民形成に大きな変化が訪れる。「ホロコースト」概念が市民社会に定着し、ナショナル・アイデンティティの一部として不可欠なものになっていくのに伴い、緑の党や極右政党など新たな政党が台頭し、「日々の国民闘争」に参入してくる。それにより、国民も変容していくのだという。そこで形成された国民がどのようなものなのか、この点については次著の課題として、著者は本書を締めくくっている。

以上、本書の内容を簡単に紹介してきた。本書については、すでに村上宏昭氏の書評があり、本書の成果と疑問点がまとめられている。[2] そこでは、著者が主張する、ハイマート映画に見られるハイマートの表象の歴史的系譜について、いくつかの指摘がなされている。一方、戦後ドイツ史、特に「過去の克服」に研究関心の一端を置く評者から見ると、特に興味深いのは、「褐色の過去」との連続性に関する記述である。そのため、本評においては、この点に関して若干のコメントを試みたい。

著者が本書で指摘している、「褐色の過去」との連続性は、「過去の克服」を考える上でとりわけ重要なテーマといえる。これまで、ナチ体制期と戦後との間の人的・思想的な連続性については、主に非ナチ化の文脈でも語られてきたが、都市計画などの文化的側面にもその表出が見出されるとの著者の主張は、一九四五年をはさむ連続性を考える上で、有益な指摘である。

しかし一方で、若者をめぐる排除と統合の問題に、「褐色の過去」との連続性を見出している第四章では、若干の疑問が感じられた。著者は、一九五〇年代以降に「異端児」として目されていたハルプシュタルケを取り上げ、当時の西ドイツ社会では、彼らを排除、或いは教化・統合することが、国民共同体の課題となったとして、ここに「西ドイツと第三帝国との類似・連続性」を指摘している。第二次世界大戦中に結成され、ナチ体制に対して抵抗を繰り返した「エーデルヴァイス海賊団」が「反社会分子」として迫害されたのと同様に、ハルプシュタルケもまた、戦後西ドイツ社会において「反社会分子」と見なされていた。著者は、「その意味で、戦後社会は国民共同体の帰属に関してナチス社会と類似した線引きを行っていた」と書いている。しかし、独裁体制下における不服従の若者に対する排除と、民主主義国家における若者の排除は、性質が異なるのではなかろうか。前者が、権力に服従しない抵抗者に対する国家による迫害の性質を持つのに対し、後者はむしろ、時代の変化に伴い、親世代の理解の範疇を越えた若者たちが登場したことに対する恐れや、世代間闘争といった側面が強いようにも思われるため、ここにナチ体制期との連続

性を見てとれるのかどうかは疑問が残る。著者は、当時ハルプシュタルケが熱中した音楽であるロックン・ロール観にも、ナチ時代の人種主義の連続性が見てとれるとして、ロックン・ロールが「異人種の堕落した非ドイツ的音楽」としてイメージされたことにもふれながら、この連続性を浮き彫りにしており、この点は非常に説得力のある議論であるが、例えば排除や教化・統合の方法などに、具体的な共通点はあるのだろうか。

また、著者はナチズムと戦後との連続性として、第三章では「植民地主義的性格」という要素も挙げている。東欧世界を「野蛮」、「劣等」と見なし、当地の民族集団を殺戮したナチズムの中には、西の「文明」世界による東の「野蛮・未開」の世界の征服・支配という植民地主義的性格が見出せると、著者は指摘する。そして、ロシア人の「野蛮さ」を強調し、ソ連下のドイツ人捕虜を「犠牲者」と見なすことで、戦中にドイツが東欧世界で犯した罪を忘却しようとする戦後西ドイツ社会にも、「植民地主義的性格」を見出すことが可能であると述べている。つまり、「東欧世界における自らの残忍な過去を記憶の片隅に置き、その世界の過去と現在の残忍性を強調することで、西ドイツ国民は『犠牲者共同体』を作り上げていった」という。この点は、戦後西ドイツ社会と東欧諸国との関係性を考える上でも重要な指摘といえよう。しかし一方で、このような「犠牲者共同体」の形成に見られる「植民地主義的性格」が、ナチズムに見られるそれと同質のものか否かについては、若干の疑問を感じた。ナチズムに見られる「植民地主義的性格」が、征服や支配を志向する、積極的で好戦的なものであったのに対し、戦後西ドイツ社会に見られるそれは、受動的で防衛的なもののように思われるのだが、「植民地主義」のなかにもグラデーションがあったということだろうか。

最後に、この「褐色の過去」との連続性が変容を見せ始めるのは、本書の対象時期から外れる一九八〇年代以降と思われるので、その後、どのような変化が訪れるのかは、是非知りたい点である。この点は著者自身も「あとがき」で、「本書は別著が出て初めて完成する」と書いているため、今後刊行されるであろう次著とあわせて本書を読むことで、さらに体系的な理解が可能となろう。

以上、評者なりのコメントを付したが、評者の理解不足や誤読による的外れな論評になっているとすれば、切にご海容願えれば幸いである。もちろん、本書の意義とその新しさは、このような評者の疑問点によっていささかも損なわれるものではない。戦後ドイツ史を扱った研究は、すでに日本でも多く存在するが、本書はそこに新たな分析の枠組みを加える、画期的な研究といえよう。特に、文字史料のみならず、映画や流行歌といった大衆文化をも分析対象としながら、大衆レベルでの国民感覚の変遷を描出する手法は、歴史学に新たな可能性を加えるものである。本書で扱われているような、一般市民の認識は、歴史学においてよく用いられる文書史料にはあらわれにくく、実証しづらいという事情から、これまで対象化されてこなかったように思われる。しかし、映画や流行歌といった大衆文化に目を向け、それをめぐる論評を含めて扱った本書は、そうした従来の空隙を埋めるものである。これまで明らかにされてきた「過去の克服」の流れを、本書で示されたような国民意識の変遷と対照させながら検討することで、より立体的に、戦後ドイツの過去に対する姿勢が明らかになるのでは

ないか。また、時間／空間という概念を分析軸にすることにより、政治史や社会史、文化史といった枠組みを超えた考察を可能にしていることも、特筆すべき点であろう。

映画や写真、大衆文化といった、多くの人の興味を惹く題材を扱いながら、確固とした分析理論と史料分析に基づく実証性と専門性を備えた本書は、幅広い読者層に届くものであろう。関連分野の研究者のみならず、戦後ドイツ史に関心を持つ学部学生や一般の読者にも、広く読まれるべき一冊である。

① 高橋秀寿『ホロコーストと戦後ドイツ――表象・物語・主体』岩波書店、二〇一七年。

② 村上宏昭「書評　高橋秀寿著『時間・空間の戦後ドイツ史―いかに『ひとつの国民』は形成されたのか―』」『史境』（歴史人類学会）第七六号、二〇一八年九月、七六―八二頁。

（四六判　二八五頁　ミネルヴァ書房　二〇一八年七月　税別三五〇〇円）

（日本学術振興会特別研究員ＰＤ）